

日本音楽集団

第16回定期演奏会

1972. 6. 7 午後7:00

都市センターホール

ENSEMBLE NIPPONIA



プログラム

1. 四群のための形象 / 三木 稔 作曲

FIGURES for Four Groups Minoru MIKI
〈TOH·KUSE·IKI·AYA〉

2. 箏・鼓・箎による“無依の咏”

“Mue-No-Uta” for Sō,
Ko and Shaku / 石桁真礼生 作曲
Mareo ISHIKETA

—— 休憩 ——

本年度委嘱作品・初演

3. 邦楽器のための〈コンチェルタンテ〉

〈CONCERTANTE〉 for / 仲俣申喜男 作曲
Japanese Traditional Nobukio NAKAMATA
Instruments

4. ディベルティメント

Divertimento / 佐藤敏直 作曲
Toshinao SATO

〔演奏〕 日本音楽集団

〔指揮〕 田村拓男

〔客演〕 芝 祐靖(竜笛) 岡田知之(打楽器)

作品について

四群のための形象

三 木 稔

日本の楽器をわたくし流に分類し、その性格などを煮つめたのがこの作品です。

四つの小品のタイトルについては、コトバの感じが音楽の感じと直結するよう配慮しました。仮名で読んでも、漢字を見ても、耳で聞いても、すぐこの作品の印象と楽器の分類が分るようならばうれしいです。

文様 くあや は臥絃楽器すなわち箏族。

居機 くいき は管楽器たち。

曲 くくせ は抱絃楽器すなわち撥族。

擗 くとう は打楽器群。

作曲当時は、この並びで、交響曲の四つの楽章のように継起することを想定していましたが、今日はひよっとするとデタラメな順番で……。

なお、この作品は1967年の作曲で、曲だけは1969年に追加しました——居機と曲はNHK委嘱です。



箏・鼓・笈による“無依の咏”

作曲の場から——伝統ということ——

石 桁 真 礼 生

わが日本列島に生を享けた吾々の人類の先祖、ニッポナントロプス・アカシエンシス、つまり明石原人や葛生原人は50万年もの昔。確実なところ、三ヶ日人や牛川人でも15万年の昔。卑弥呼からでも2千年の歴史がある。たかが数百年の伝統など、どれだけ本質的な意味をもつてであろうか？

『雅楽も、移入当時は非伝統音楽つまり洋楽だったのだ。』しかし、日本人の特質(と私は考える)たる同化力によって、独自の血の素として形成してきたことも事実だ。この意味で、『伝統の实在』は肯定しなければならないが……。

ともあれ、常日頃その根源を考え、その具象的方法をさぐり、その本質に迫らなければならない。ただ作家が作曲の場において、それを意識しつつ作曲することは、邪念の介入であり、偏執であり、墮落でさえあるかもしれない。まして、楽器や、魔法、その他の現象としての音素材に、これを求めるのは安易すぎる。

伝統への迫迫の可能性は、全生活を通して形成される心と、その表現の問題にのみ存在する。私にとって、オーケストラであろうと、箏、鼓、笈であろうと、伝統への迫迫という観点にたっただとしても、その差はないのである。

今夜の“無依の咏”にしても、これらの楽器によって作品をかいてみたかった。というだけのものである。(1970年、日本音楽集団によって放送初演、NHK委嘱作品)



邦楽器のための

＜コンチェルト＞

仲 俣 申 喜 男

この曲では、邦楽器のもつ独奏性と「合奏」とを止揚する方法として——これは「尺八の音楽」以来とってきた手法なのだが——一人の奏者の発する音が、次の奏者の音を誘い出し、そして更に波及する、即ち個々の奏者の内的リズムの応じ合い、ぶつかり合いが全体の動的リズムを生み出すという構造をとっている。動的な旋律、和声もまた同様にして形づくられる。

したがって、奏者間の呼吸の通い合いの如何、いわば「連繫プレイ」の緊密さ如何が、この曲の performance の死命を制する鍵となるだろう。

曲は鐸音をもって始り鐸音をもって終る。自然——人間をも包摂する自然の語りかける声に虚心に聴き入ること——がこの曲の発想の根源となった。

ディベルティメント

佐藤 敏直

この曲は集団の委嘱をうけて、1969年の秋、第10回定期演奏会で初演されました。

当時、日本の楽器については、おっかなびつくり、というのが正直なところだったのですが、その練習や録音などを通して、日本の楽器が、安定した信頼を私の中に形づくったことも確かです。

しかし二年余経た今、私がこの作品に対してもつ悩みは、この曲の抒情的な、私にとって極めて自然に身を委ることのできる世界についてです。この世界との訣別を意識すればするほど、それだけこの作品への逆戻りもまた私の中に常に作用するわけで、その現象がひどく痛める、とでもいったらいいのでしょうか。

今夜の再演にあたって——以前は大幅に手を加えようと企んでいたにも拘らず——部分的な修正に止ったのも、今の自分との距離をちぢめる必要を感じなかったことに加えて、この世界への記憶を解体したくない、という意識があったからです。

三楽章からなり、本来は10パート各1人づつなのですが、今夜は研究団員の方々も加って、1パートを複数で演奏する部分が多く、合奏として、より効果的な面白さが表われれば、と興味をもっています。

団員の発言

横山 勝也

御来場を心から感謝致します。

我が口言わんと欲する所

己に言えり古人の口

我が手書かんと欲する所

己に書かる古人の手

古人の前に生れずして

偏に古人の後に生る

一十二万年

汝と我みな有るなし

我が再び来るの時を等るも

還た古人に後る、や否や

『遺懐』と題する清中期の詩人袁枚の作と云います。公害に苛立ち、ベトナムの悲惨を嘆く時、人

類は進歩したのか、退歩したのか分らなくなります。でも科学は確実に進歩し、国々は国際化の道を歩んでいます。

それぞれの国の良いところを学ぶことは素晴らしいことです。明治維新以来、日本人は外国に学ぶ事、実に大でした。着物から洋服に、食生活や住居もどんどん変りつつあります。音楽も変わりました。国際化に伴う必然として、ヨーロッパやアメリカの音楽がその主流を占めるこのごろです。しかし国際化が進めば進む程、篩にかけた土や粉の様に、日本人の日本人たる所以である日本の本質が考えられて来るのですが、かつて日本音楽集団の母体となった東京尺八三重奏団結成の意義もその様な視点の上に、一人の力よりは三人の力が、と云う考えを根底に、尺八三重奏と云う様式を開拓したのでした。又日本音楽集団に発展した基本的理念もその辺にあったと信じています。三重奏団以来十年、集団結成以来はや八年の才月を迎えました。人と人との連帯の意識、新しいものを生みだそうとする情熱は試行錯誤を重ねながらも、レパートリーの中から、アマチュアの人達にも愛好される幾つもの作品を生みました。新しい団員、それに研究団員と云う新進を迎え、外部の皆様方からは暖かい御支援を頂いて、手弁当の集りも団体らしく大きくなって参りました。十年前には絶無であったプロ志望の青年も多く責任の重さを痛感する毎日ですが、伝統を守り、新しいものを生み出すと云う事は実に難しい事です。人間は所詮、保守ばかりを考えて居られないし、かと言って革新ばかりも考えて居られないようです。安住などもともと無いのだと知っていますが、絶えず変化し、やがて否応無く死なねばなりません。それまでをどう生きるかが問題ですが、集団では、作曲家を心として、各楽器を演奏する仲間達の共感の響であり度いと思います。

良寛様の言葉

『古風は漢魏に擬し、近体は唐を師となす。斐然としてそれ章を成し、之に加ふるに、新奇を以てするも、心中の物を写さずんば、多しと雖もまた何かせん。』

お知らせいろいろ

- ★ 伝統音楽シリーズNo.2を7月5日、青山タワー・ホールで行います。今回は坂井とし子の企画・構成です。(ロビーで発売中)
- ★ 第2回夏期合奏研究会を軽井沢で行います。前期8月7日～10日、後期10日～13日です。(案内チラシ参照して下さい)
- ★ 9月 日、 で渡欧記念演奏会を行います。
- ★ 新聞などで御存知のように、日本音楽集団では初のヨーロッパ公演をこの秋行います。詳細は記念演奏会のパンフレットに載せますが、主なものは次のとおりです。
 - 9月16日 東京発、サベナ機でブラッセルへ。
 - 9月17日 ベルギー・ゲントの〈フランドル音楽祭〉出演。
 - 9月19日 B・R・T(ベルギー・テレビ)で録画。ブラッセル。
 - 9月20日 ケルンで公演及び放送録音。
(21日から25日の分は後に発表します)
 - 9月27日 〈ベルリン音楽祭〉出演。
 - 9月29日 プラハで公演。
 - 10月1日 〈ブルノ国際音楽祭〉出演。
 - 10月2日 O R F(オーストリア・テレビ)公開録音。ウィーン。
 - 10月3日 ミュンヘンで公演、及び放送録音(バイエルン放送)。
 - 10月5日 ザグレブ(ユーゴ)で公演。
 - 10月6日 ザグレブ近辺で公演予定。
 - 10月9日 ベオグラード(ユーゴ)で公演。
 - 10月10日 同上。
 - 10月12日～17日 ソフィヤほか、ブルガリヤで4回公演。
 - 10月18日～20日 ブカレストほか、ルーマニヤで2回公演。
 - 10月22日 アテネ発、サベナ機で東京へ。
 - 10月23日 東京帰着(20:00の予定)。
- ★ 第17回定期演奏会は1973年1月24日、都市センター・ホールの予定です。
- ★ 1973年3月に新人演奏会を行います。
- ★ 集団及び団員が主として関与し、現在発売されているもの、及び近く発売予定のレコードは次のとおりです。
 - ◎現代日本の音楽=3 コロムビアOS-10052-J
 - ◎三木稔の音楽 コロムビアJ X・21-4
 - ◎日本美の響き コロムビアY S-10097
 - ◎日本音楽集団による日本の民謡
キングS K K-673
 - ◎日本の楽器 RCAビクターJRZ-2520~21
 - ◎人形風土記/子供のための組曲
RCAビクターJRZ-2523
 - ◎日本の楽器入門 コロムビアOS-10127
6月25日発売
 - ◎古典↔現代/日本音楽集団の世界
(註:これは日本楽器による管絃楽入門と副題され、集団演奏の各楽器古典8曲と三木稔作曲「凸」の新録音が裏表に入ります)
コロムビア(8月25日発売)
 - ◎佐保の曲・竜田の曲他/箏:野坂恵子
ビクターV X-109
 - ◎日本音楽集団とオーディオ・ラボラトリーの共同企画で、子供と和楽器を結ぶ「阿波の子タヌキ譚」「三つの阿波のわらべ歌」(三木)、「子供の四季」(長沢)の三作品の四チャンネル録音を八王寺市民会館で先日終えました。合唱は実力日本一といわれる徳島少年少女合唱団です。
- ★ 集団関係で演奏した曲目の楽譜、本式の印刷ではありませんがコピーを用意できているものがありますので事務所へ問い合せただけ実費でおわけいたします。
 - ◎スコア
長沢勝俊作品 人形風土記、子供のための組曲、二つの舞曲、子供の四季、箏四重奏曲、萌春、絵馬

三木稔作品 古代舞曲によるパラフレーズ、凸、
三つの阿波のわらべ歌、阿波こだぬき譚、雅
びのうた

佐藤敏直作品 ディベールティメント

若松正司作品 民謡群想

松村禎三作品 詩曲

◎パート譜

長沢作品 人形風土記、子供のための組曲、箏
四重奏曲、崩奏、絵馬、詩曲

三木作品 古代舞曲によるパラフレーズ、箏譚
詩集、孤響

★ 現代邦楽運動の拡りのため、集団に新しい血
を導入するため、4月から初の研究団員が入団
し頑張っています。今日の最終ステージには、
団員と一緒に出演しています。暖かく見守って
やって下さい。多分、来春も第2期募集をする
と思いますので、入団ご希望の方は腕によりを
かけてお待ち下さい。

——日本音楽集団団員——

〈団員〉

望月太八 (篠笛・能管)
横山勝也 (尺八)
宮田耕八朗 (尺八・横笛各種)
坂田宏聰 (尺八)
杉浦弘和 (三絃)
山田美喜子 (琵琶)
半田綾子 (琵琶)
坂井とし子 (箏・三絃)
白根きぬ子 (箏)
野坂恵子 (箏・三絃)
宮本幸子 (十七絃)
田村拓男 (指揮・打楽器)
清水義矩 (マネージャー・打楽器)
高沢弘道 (マネージャー)
尾崎太一 (打楽器)
藤舎成敏 (打楽器)
高橋明邦 (打楽器)
中沢啓光 (打楽器)
長沢勝俊 (作曲・代表)
三木 稔 (作曲)

〈研究団員〉

鳳声晴由 (篠笛・能管)
三橋保源 (尺八)
石井寛道 (尺八)
野口美恵子 (三絃)
田原順子 (琵琶)
吉村七重 (箏)
池上早苗 (箏)
渡辺泰子 (箏)
長沢宥子 (十七絃)
菊地麻美子 (十七絃)
藤井 修 (打楽器)
霜島素子 (理論)

〈団友〉

芝 祐靖・増田睦実・砂崎知子・芹沢英雄
鞍掛昭二・川崎祥悦・佐藤敏直・元橋康男
広瀬量平・田中利光・仲俣申喜男

第16回定期演奏会のスタッフ

企画 宮田耕八朗・坂田宏聰

マネージメント 清水義矩

舞台監督 一谷俊彦 (未来プロモーション)

日本音楽集团事務所

渋谷区神宮前 3-6-14 TEL. (402) 0709